

新規採用教職員辞令交付式  
教育長講話  
「新任教職員に期待するもの」

◇日 時：平成28年4月1日（金）

◇場 所：県立郡山高等学校

◇配布資料：まなびの支援



辞令交付



教育長講話

## 1 はじめに

ただ今の辞令交付式の宣誓におきまして、代表の方から立派な誓いの言葉をいただきました。誓いの言葉に込められた決意に大変感動いたしました。私も40年ほど前に教員としてスタートしましたが、その頃を思い出しております。

私は平成11年度に奈良県教育委員会事務局に異動し、以来、教職員の採用に携わってまいりました。平成11年度の採用者は41名でした。今年はその10倍近くとなる387名の皆さんをお迎えいたしました。皆さんが奈良県教育にとって、大きな力になってくれることを心から期待しております。皆さんの中には、採用試験に何度もチャレンジして、やっとの思いで合格された人もいらっしゃるでしょう。今日の大きな喜びと緊張感をこれからも、もち続けていただきたいと思います。

## 2 2030年の社会について

さて皆さん、約15年後の2030年はどのような社会になっているか考えたことはありますか。皆さんには今後、このような少し先のことも考えながら子どもの教育をしていただきたいと思いますのですが、今、どのように想像されるでしょうか。

現在、少子高齢化が進んでいます。2030年になると更に少子高齢化が進んで、日本の総人口に占める65歳以上の高齢者の割合は31.6%、つまり、3人に1人が高齢者になるという予測があります。また、すでにグローバル化や高度情報化の大きな波が押し寄せています。これから更にコンピュータも進化していきます。先日、韓国の囲碁のトップ棋士がコンピュータに敗れたというニュースもありました。コンピュータ自身がどんどん学んでいくような人工知能が開発されているので、今後10年、20年経った頃には、多くの仕事がコンピュータに取って代わられているでしょう。ニューヨーク市立大学大学院センターのキ

ヤシー・デビッドソン教授は、「子どもたちの65%は将来、今は存在していない職業に就く」と予測をしています。このような将来の変化を推し量ることが大変困難な時代を前にして、皆さんは子どもの教育を行わなければなりません。予測できない未来に対応するために、社会の変化に受身で対処するのではなく、自ら未来の社会を予測して対応できる子どもを育てていく必要があるのです。文部科学省でも「アクティブ・ラーニング」などの具体的な言葉を示して、授業の在り方を大きく転換させようとしています。この中で、どのような教職員にならなければならないのでしょうか。

### 3 魅力ある人間性について

今日、ビッグニュースが2つ飛び込んできました。奈良県の智辯学園が、第88回選抜高等学校野球大会で同校としては初めての全国優勝を果たしました。智辯学園は今年、創立50周年を迎えますが、その記念すべき年の快挙です。そして、今朝、錦織圭選手がマイアミ・オープン2016でベスト4に入りました。錦織圭選手は、日本男子テニス界の選手としては今までにないほどの大活躍をしています。年齢は26歳で、皆さんとほぼ同じ年齢です。この活躍はもちろん本人の努力の賜物ではありますが、マイケル・チャンコーチの指導が大きな力になったと思います。マイケル・チャンコーチは錦織選手を指導する中で、1日に何十回も同じ言葉を伝えたそうです。「Believe in yourself (自分を信じろ)」と。錦織選手は「いつの間にか自分もそう思わなければいけないようになってきた。」と話しています。錦織選手は自信をもって力を発揮できるようになり、今の成績になったのです。このようにマイケル・チャンコーチの指導は、精神面の指導が半分、スキルと体力の指導がそれぞれ25%ずつです。我々はつい、コーチの指導とは、スキルや体力の指導が中心だと思いがちですが、実は精神的なサポートこそが重要だということなのです。このことは子どもと教職員の関係にも当てはまるのではないかと私は考えます。子どもを大きく成長させるためには、教職員はただ知識・理解の指導、つまり認知能力の指導を行うだけでなく、それ以上に意欲や忍耐力、自制心などの非認知能力も大切にしなければならないのです。自ら学ぶ意欲をもった子どもは、将来、自ら人生を切り開く力をもつことができます。有名な教育学者ウィリアム・ウォードは「平凡な教師は言うて聞かせるだけ。よい教師は説明ができる。優秀な教師は自らそれをやってみせる。しかし、最高の教師は子どもの心に火をつける。」と語っています。平凡な教師は知識を与えるだけだが、よい教師はそれを理解させることができる能力ももっている、優れた教師はそれを実現することもできる、しかし、最も優秀な教師は子どもをやる気にさせるのだということです。ここにいる皆さんには、子どもの心に火をつける教職員になっていただきたいと願います。

また私は皆さんに、子どもにとって記憶に残る教職員になってほしいとも思っています。記憶に残る教職員とは、まず勝負強さをもった教職員です。

1960年代、私が子どもの頃、「巨人・大鵬・卵焼き」という当時の子どもに人気のあるものを表す言葉が流行していました。その中の一つである、プロ野球の巨人軍に2人の看板選手がいました。王貞治と長嶋茂雄です。いくつかの日本記録をもつ王選手は「記録に残る選手」、一方、長嶋選手は「記憶に残る選手」と言われています。チャンスにめっぽう強く、日本シリーズや天覧試合などの大舞台でホームランを打って大活躍をする長嶋選手は、国民的なスターです。この長嶋選手は勝負感覚があつて非常に勝負強いと言えます。

勝負感覚のある人というのは絶対に諦めません。そして、「できません」「ありません」「知りません」という言葉は使いません。その代わりに、何かしら他の答えを用意します。何かしらの努力をします。

長嶋選手にはこんなエピソードがあります。通っていた立教大学の英語の卒業認定試験で「I live in Tokyo.」を過去形の文章にするという問題が出ました。実に簡単な問題です。しかし、一心に野球に打ち込まれていた長嶋選手は、「I live in Tokyo.」の動詞を過去形に変えることが分かりません。さて、長嶋選手は何と言ったのでしょうか。「知りません」と言うと言巻の終わりです。「分かりません」と言うと言単位を落とします。そこで、「I live in Edo.」と答えたのです。「東京」を「江戸」という過去の名前にしました。これは冗談のような話ですが、簡単に「自分は知らない」「分からない」「できない」と言わず、自分のもてる全ての知識の中から何とか答えをつむぎ出したのです。

皆さんも考えてください。例えば面接で「組織をまとめるために英語で指導したことはありますか。」と聞かれたとき、どう答えますか。英語は苦手だからと、「できません」「ありません」「知りません」と言っていると、面接試験に落ちてしまうでしょう。何かを答えなければいけません。でも、難しく考えずともよいのです。「懇親会をこれから始めようとするとき『Let's go』と言いました。」など、そんなことであっても組織を引っ張っていったと答えることができるのではないかと考えてほしいのです。教室で児童生徒から、三者懇談で保護者から、職員室で同僚や上司から、どんな質問をされても「できません」「ありません」「知りません」と言っははいけません。諦めて投げ出してしまいう前に、自分で必死に考えて、今できる最もよい答えを出さなくてははいけません。このように自分で何とかしようとするメンタル力が今後は必要です。そんなメンタル力をもっている教職員こそが、子どもの心に残るのだと私は思っています。

次に、コミュニケーション力の高い教職員です。コミュニケーション力は教職員にとって必要不可欠な力です。授業や学級活動、ホームルーム活動などで、40人ほどの子どもを相手に一度に教育を行います。養護教諭、栄養教諭、事務職員の皆さんは、全校の児童生徒を相手にします。授業の時に一人一人に目を配って「今日、この子は体調が悪いのではないか」と思って声を掛ける。あるいは「何かあったのではないか」と思っ、小さな変化にも気付いて動かなければなりません。教職員というのは特殊で鋭敏、繊細なコミュニケーション力が必要なのです。

このことを具体的に考えてみましょう。子どもに何かを伝えたいとき皆さんはどうしますか。言葉で伝えるだけでしょうか。それだけでははいけません。自分の意識を子どもに向けなければなりません。言葉だけでなく、意識でも子どもに伝えてあげる。例えば、担任の先生であれば、クラスの全児童生徒との間に、栄養教諭、養護教諭、事務職員の皆さんならば学校の児童生徒全員と、細くても切れない意識の糸を張ってください。子どもと意識の糸をしっかりと張る。これが非常に大切だと思っます。もちろん、担任の先生が子どもと意識の糸を張ろうとしていても糸の切れることもあるでしょう。そのときには、学校全体でいろんな先生方がその子とつながっている必要があるのです。教職員個人が子どもと意識の糸でつながる、そして学校組織全体が子どもと意識の糸でつながる、そうすることによって子どもの命や子どもの安全や子どもの教育が守られていくのではないかと考えます。

#### 4 奈良県の教育について

現在、奈良県の教育においてはいくつかの課題を抱えています。その課題の中で私が最も大きな課題だと考えているのは、子どもの学ぶ意欲の低下です。

このような調査結果があります。内閣府が平成25年度に13歳から29歳を対象に行った『我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』において、「勉強に打ち込んでいるときに充実していますか」という質問に肯定的に答えている日本の若者の割合が、調査した国の中で最も低いことが分かりました。「自分の将来について明るい希望をもっていますか」という質問についても、イギリスでは約90%の若者が明るい希望をもっているのに対し、日本の若者は約60%しか明るい希望をもっていないことが分かりました。これは日本の社会に問題があるからかもしれませんが、我々の教育にも問題があるのではないかと真摯に受け止めなければならないと思います。

子どもの意欲を向上させるにはどうすればよいのでしょうか。その答えは、まず教職員自らが学び続けることです。自らが学ぶことの面白さを感じることで、子どもたちに新しい情報、知識とともに学ぶ喜びを伝えることができ、学ぶ意欲を湧かせ続けることができると思います。教職員自身が学ぶことの面白さを感じていないのに、子どもが学ぶ面白さを感じるはずなどありません。教職員が学ぶ面白さを感じていることで、子どもに学ぶ面白さが伝わるのです。やはり、教職員は教える専門家であると同時に、学ぶ専門家でなければならないということです。

奈良県では、学び続ける教職員を支援するために、いくつかの新たな取組を始めています。皆さんが、例えば10年後、自分の指導法について学び直したいと考えたとき、読書することで学び直したり、教育研究所で研修をしたりする方法がありますが、奈良県では、中堅教員を対象に奈良教育大学と協定して実施する奈良教育大学教職大学院での研修派遣事業を行っています。派遣1年次には、教職大学院に通って研修をし、派遣2年次には教育研究所で長期研修員としても研修していただき、より良好な環境で研究・発表を進めることができます。学校の現場では、学校の中心となる教職員が教職大学院へ研修に出ることは業務上、つらいことです。しかし、研修を終えた後に、学校現場にその学びの成果を生かしていただければ、それは何倍にも大きい力になります。また、初任者研修においても、1年目の日数を少し減らしてその分を2年目、3年目に研修していただけるようにしています。このように、教育委員会では学び続ける教職員の支援をしていますので、うまく活用してください。

次に、子どもの体力の向上についてお話しします。喜ばしいことに、いろいろな取組の結果、奈良県の子どもの体力は向上してきています。かつて全国最下位であったものが、この二、三年は全国平均に並ぶようになってきました。しかし、体力向上に学校が果たすべき役割は、以前にも増して大きくなっています。

今の子どもには3つの「間」が喪失していると言われていています。まず、「仲間」です。少子化が進行し、異年齢の集団が作りにくくなりました。ゲームをするような少人数のグループはあっても、先輩がいて後輩がいるというような地域で遊ぶ仲間はなくなりました。次に、「時間」です。子どもの放課後は忙しいのです。習い事や学習塾などで自由な時間がありません。3つ目が「空間」です。外へ出たら危険だからと遊ぶ場所がないのです。このように3つの「間」がなくなっているのであれば、学校に子どもがどんどん遊べるよ

うな環境を、我々が作るべきだと思います。学校で遊ぶ中で、運動が好きになり、そして体力がどんどん向上する。そんな学校づくりをしてほしいと願っています。

子どもたちの意欲をかき立てることができれば、おのずと学力も体力も向上します。様々な課題の解決の糸口となるでしょう。奈良県の教育課題についても常にアンテナを張り、その課題の克服にも皆さんの力を注いでください。

## 5 辞令書・宣誓書について

本日、皆さんに辞令書を交付いたしました。この辞令書と宣誓書についてお話させていただきます。県立学校に着任される皆さんは、県で採用された県の職員です。そして市町村立学校に着任される皆さんは辞令書に書かれている市町村で採用されました。ただ、市町村で採用となつてはいますが、皆さんの給与は、県立学校の皆さんと同様、奈良県が支払っておりますので県費負担教職員となり、任命権は奈良県教育委員会にあります。また、宣誓書も県民に対する宣誓です。ですから、ここにいる皆さんは全員、県民に宣誓しているのだという意識をもってほしいと思います。公の立場の公務員には、非常に厳しい服務規律が課せられており、教職員の服務規律についても同じです。まず、常識で判断し、先を想像して、何をやれば良いのか、やってはいけないのかを考えて行動してください。教職員という職業に恥じない、誇りある行動をしていただきたいと思います。

## 6 おわりに

最後に、私の好きな物理学者アルベルト・アインシュタインの言葉を皆さんに贈りたいと思います。彼の教育観について寺田寅彦とらひこが書き記した言葉です。「たいていの場合に教師は必要な事項はよく理解もし、また教材として自由にこなすだけの力はある。しかしそれをおもしろくする力がない。これがほとんどいつでも禍わざわいの源になるのである。先生が退屈の呼吸を吹きかけた日には生徒は窒息してしまう。教える能力というのはおもしろく教える事である。どんな抽象的な教材でも、それが生徒の心の琴線に共鳴を起させるようにし、好奇心をいつも生かしておかねばならない。」(『寺田寅彦全集』第3巻 「アインシュタインの教育観」) 皆さん、どうか子どもを窒息させない教職員として、しっかり活躍してください。期待しております。

御静聴ありがとうございました。